NO.76　　1983.6.1発行

ウィンドー

東村山市民テニスクラブ協議会機関紙

コートとり当番担当クラブ		
6月	7月分のコート	恩多B
7月	8月分のコート	青葉B
8月	9月分のコート	東住A

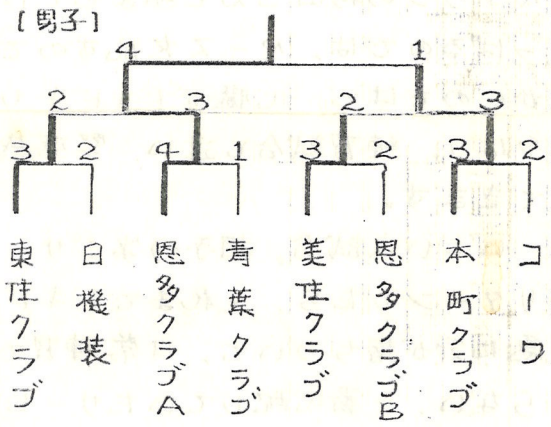
発行責任者　柳　利夫
住所　東村山市萩山町
5-6-26-301
Tel. 0423-95-9849
編集責任者　川村英明

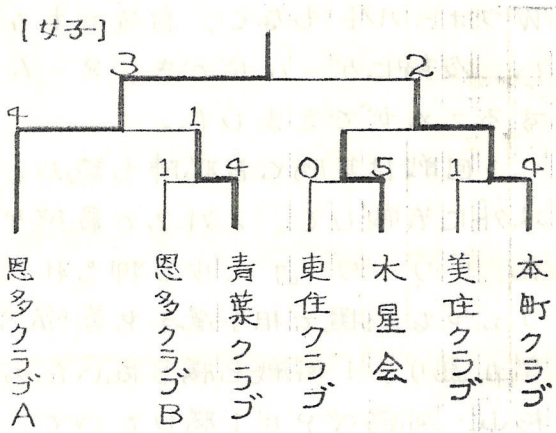
太田杯　恩多クラブ優勝！
（男・女）

5月8日（男子），5月15日（女子）に，第7回太田杯争奪市内団体戦が行われました。

男子では，対日機装戦においてマッチポイントをしのいで勝ち上がってきた，前年度優勝の東住クラブを××の恩多クラブがみごとおち破り，ついで決勝戦で健闘本町クラブを討ち取り優勝しました。恩多クラブ，毎年本命視されながらのひさしぶりの勝利です。

女子では，3年連続，恩多クラブと本町クラブとの決勝となり，これまた3年連続で2－2からの最終戦にもつれこみましたが，本町クラブの善戦およばず，恩多クラブの5連覇となりました。





脱帽！

青葉，美住，東住クラブのみなさん，おつかれさま。

編集担当が敗戦のショックから，まともな取材活動をしていませんので，各クラブのコメントなどは，次号に譲りたいと思います。

かわりに，失意の東住クラブのなかで唯一人明るい，河嶋選手に登場してもらいました。（ウラコ）

☆5月号の混合ダブルスの成績表に誤りがありましたので，お詫びして（佐藤），訂正いたします（木村）。5，本保・小林(紀)があたかもベスト8に進出したかのように太線で表示してありますが，大きなまちがいで，ベスト8はスコアの示すように7，笹野井・土方の熟年ペアでありました。

★10年誌とワッペンができました。

昨秋から懸案・未解決のままになっていました"市民テ10周年記念行事"の『東村山市民テニスクラブ・10年のあゆみ』と『シンボールマーク』たいへん遅くなりましたが，やっとできあがってきました。

どちらも，各クラブの会長からお受け取りください。シンボルマーク～会員1名につき1枚無料，追加は1枚140円です。　10年誌～1家族につき1冊無料，追加は1冊1,000円です。

また，'83年度の会員名簿もできましたので，同時にお受け取りください。

★58年度下期分の会費納入のお願い。
＜事務局 財政部＞

1．会費（6ケ月分）

(1)一般会員	6,000円
(2)家族会員	4,200円
(3)家族ジュニア会員	3,000円
(4)単独ジュニア会員	6,000円
(5)休部会員	1,000円

2．納入期限　　6月30日

3．取扱銀行，口座

クラブ名	銀行名	口座名	口座番号
東住クラブ	第一勧業銀行久米川支店	東村山市民テニスクラブ協議会 東住クラブ	普 No. 1179341 栗原千枝子
恩多クラブ		〃 恩多クラブ	普 No. 1179600 栗原千枝子
本町クラブ		〃 本町クラブ	普 No. 1180137 栗原千枝子
青葉クラブ		〃 青葉クラブ	普 No. 1180269 栗原千枝子
美住クラブ		〃 美住クラブ	普 No. 1180153 栗原千枝子

59 私とテニス

本町クラブ　桜井宣行

中学、高校と6年間卓球部に在って、夏休みも冬休みも、ランニング、なわとび、うさぎとび等の体力作りや、卓球台での練習にあけくれていました。帰宅も遅くなり、日曜は試合、他のスポーツには興味をいだくひまもありませんでした。

当時、テニスに関しては、何かの大会の決勝戦を白黒テレビで見た時、選手がチョッキを着てプレーをし、しかも逆サイドに決められた時は、実にあきらめが早く全然追おうともしない。何しまあ卓球とくらべると鈍重なスポーツだなあと思っていました。もちろん現在は、こんなに激しいスポーツも少ないのではないかと思っています。（特にプロが何時間もかけてあたかも格闘技のような試合をするのを見て）

そんな私が、現在のようなテニス狂になったのには、次のようなきっかけがありました。

それは5、6年前の春のことでした。麻雀ばかりではなく、何かスポーツをしたいと思っていた時、友人の誘いで、毎週月曜日にナイターでテニスを指導してくれるというのです。場所は中野区営の哲学堂コートでした。メンバーはほとんど全員がラケットを持つのが初めてで、男性は6名くらいで全員中年、女性はその倍くらいで、そのほとんどが某女子大学のOGで、当世風にいえばルンルンギャルでした。でも私達はテニスを習うのに必死で、彼女達の長い足、短いスカート等は目にはいりませんでした。『そんな事は信用できない。必死にやっていたらもっとうまくなった筈だよ。』『そう言われれば自信がありませんハイ。』

コーチは現役の警察官とのことでしたが、上手な方達で（2名）特に初心者を本当に良く面倒みてくれました。スポーツでかいた汗が実に気持よく、また、練習後のビールのうまいこと（当時は小瓶を1本あけるのがようやくでしたが、市民テニスにはいってからは大瓶を飲めるようになりました）等々たちまちすぎた2時間でした。次の月曜日が待ちどおしいようになりました。

テニスというのは楽しいもので、どうして高校でテニス部にはいらなかったのかなんて考える仕末。そして夏には山中湖での合宿、秋には部内でのシングルス大会など楽しい半年でした。しかしナイターは冬にはできなくなってしまい、途方にくれていたところ、市民テニスの募集を教えていただき入会させてもらい、現在に至りました。

～ 災い転じて福となす ～

東住クラブ　河嶋和興

『河嶋さん、今度の日曜日都合付きます？』『ええ、でも何で？』『いや、団体戦があるんで。じゃあ、ラケット持ってこなくていいから来てくれます？』『はあ？』我チーム木村キャプテンとのコートでのやりとりである。いつもの軽いジョークなのか、ラケット不用で出場とは、その時は突然の誘いに、『はい』と言って、内心喜んでいたが、時間が立つにつれて、『俺より上手な人いくらでもいるのに』と不安になってきた。頭の中で東住クラブの主力選手を数えると、コーチ級が10名以上はいるはずなのに。テニスをはじめて未だ2年と少し？、それに公式試合に、一度も出た事がないのに。

当日、冗談真に受けて、一応ラケット持参で、コートに来ました。抽選の結果、日找苑と。いきなり第一試合に出場です。それも第1コート。内心、第1コート以外ならどこでもと思っていた。ベテランの杉山さんと組ませていただき、足をひっぱるのでは、ペースを乱すのでは、人前で恥をかくのではと、心臓がドキドキしてきました。やはり、練習試合と違い、緊張感と重圧が加わってきます。

いよいよ試合。相手の第1サービスを無難にリターンしたら、それまでドキドキしていたのが急に気が落ちついて、日常練習ではなかなか決まらない、一番心配していたサービスが、一度のWフォールトもなく、自分でもびっくりするぐらい、冷静にゲームができ、8－6と予定外に1勝することができました。

1回戦は葉勝と首脳陣も読んでいたのですが、（いいえ…首脳陣）以外に苦戦して、2対2で最終ゲームに持ちこまれ『ワーワー』で少し押されぎみ。我々全員、フェアな応援で相手選手を萎縮させ、というより実力通り、1回戦を勝ち抜いたのです。その時、杉山・河嶋ペアが1勝していて、本当によかったなあと思いました。

やはり、ベテランの方は勝って当然と見られるので、それだけ本人は精神的重圧がかかるのだと思う。また、それを乗り越えなければ上達しないと思う。私の場合、負けて当然、相手の胸をかりるという気楽さがあったので、途中から冷静に試合ができたのだと思う。これを機会に、色気を出さず、無欲で、練習・試合に意欲を出していきたいと思う。

編集後記　当日、ラケットを背中にかくした河嶋さんを見て、シマッタ！と思った。